

反障害通信

12. 9. 22

38号

何のために研究し、何のために議論し、何のために論攷するのか？

理論的なことを考えるひとにはいろんな立場があります。

学者としてそれを生活の糧にしている、ある一定の期間で論文を出していくことを仕事にしているひと。探求心で学をやっている、自己表現活動としての学として、文を書いているひと。それぞれの立場があり、その立場の違いをどうこういうことではないと思います。

で、わたしはというと、自分自身の被差別というところから、そして自らの差別性をとらえ返しながら、その差別をなくしたいというところでの運動のための理論と意識して学習し、議論し、文を書いています。もちろん学をやっているとそれなりに探求心のようなことも出てきます。知的欲求のようなことが出てきます。そこでの知のもつ抑圧性というようなことでの反差別の理論の矛盾のようなことにも陥って行きます。また、議論をやっていると論争の「争」の争いというようなことで、競争社会で身につけさせられた負けたくないというようなところで、深層心理的なやっつけ主義のようなことがでてくるのではないかと、自分ではよく分からないのですが、そういうことがあるのかもしれないと考えたりしています。

理論的なことをやり議論をしていると「自分の理論の優位性を押しつけようとしている」というような批判をもらうことがあります。ですが、そもそも反差別のための理論、そのような差別的な心情ということを超えるための理論ですから、常に何のための理論か、議論か、論攷なのか、ということを考え、反差別ということで、理論形成していきたいという思いをもっています。ですから、「優位性」などという差別的な心情はむしろそれこそ否定するようなことです。

それにそもそも、いろいろ理論を積み重ねて行くと、また本を読んでいくとそれなりの自負心のようなことも起きてくるのですが、むしろ本を読み勉強をすればするほど、自分の不勉強を感じていきます。ですから、「論の優位性」などを感じるのは不勉強の不勉強（自分の不勉強が分からない、自分自身がとらえられていない）という事態で、学的前提がないといえるようなことではないかと思うのです。

知の抑圧というようなことを考え、それでも理論的深化は必要だということで、知を求める矛盾のようなことがあります。

そもそも「障害者運動」には反差別運動には、そのようなことがついて回っています。

それは青い芝の横塚さんが残したことば「はやく、ゆっくり」ということで端的に表されていることに通じることです。

運動には「はやく」ということが求められる、しかし、それは「障害者」の存在そのものの原理「ゆっくり」を否定されることにつながりかねない、そのような矛盾のせめぎ合いの中でしか「障害者」の活動はあらざるを得ない、そもそも運動ということはそのようなことで、それだからこそ、その利害はユニバーサルなこととして進んでいくということなのではないかと思っています。

(み)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 38 号」アップ(12/9/22)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリーを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡さきにメールくださっても構いません。メールをされない方は携帯に **090-9857-3431** に連絡ください。

読書メモ

バタバタして本がなかなか読めないでいました。

スピヴァクの本に戻りました。一気にもう一冊『ポストコロニアル理性批判』を読みたかったのですが、気になっている雑誌を何冊か挟みます。

たわしの読書メモ・・ブログ 211

・『現代思想 1999 年 7 月号 特集=スピヴァク』青土社 1999

ブログ 208 で読んでいたスピヴァクの本の訳者註の中で紹介されていた雑誌で、古本で探し出しました。

最初に、訳者や研究者の鼎談があり、スピヴァクへのインタビュー、スピヴァクの論攷の訳が 5 本、そして『サバルタンは語るができるか』の訳者の訳者註で紹介されていたその訳者自身の「得策ではなかった結語？」という文、「できるか—できないのか」ということを巡る論攷です。そしてスピヴァク論的な文が 4 本となっています。

こういう特集の雑誌は、わたしは二つの使い方をします。ひとつは、その著者の本を本格的に読んでいく前に入門書的に読み流しておくこと。もうひとつは、主著を読んだ後に、ひとつ(ひとつ)の分野を拡げ・深めるところで更に読み込んでいくこととして特集を読むという読み方です。尤も、最初に入門書的に読んで、本編をあたり、最後にその特集雑誌に戻るという読み方もできるのですが、そこまで丁寧な読み方はできていません。

今回のわたしは前者です。いつもは読み飛ばす読み方をそれなりに身につけていたのですが、この特集の中の文は、スピヴァクをすでに読み込んでいることを前提にしている文が多く、とても四苦八苦ししました。

さて、最初の鼎談「スピヴァクあるいは発話のポリティクス」は入門書的に読めました。スピヴァクのインタビューと論攷は、サバルタンに関すること2本「アポリアを教えること」「サバルタン・トーク」。デリダをとおしてフーコーを読む「権力／知、再論」。デリダを通してマルクスを読む「デリダにおけるマルクスの限界と可能性」。ナルススーエコーの物語から精神分析（フロイト）を読む「エコー」という構成になっています。スピヴァク論は最初の論攷、後藤浩子「「帝国主義」を感知する」がグローバルゼーションにつながるポストコロニアリズム論として、次の『サバルタン・スタディーズ』の軌跡とスピヴァクの〈介入〉はインドのサバルタン・スタディーズグループとのスピヴァクの微妙な関係を押さえています。そして「洗濯屋の長大な換喩的「リスト」」はサバルタン概念につながるネイティブ・インフォーマントという概念から独自の論を展開している長原豊さんの論攷です。そして最後の友常勉「「経験的なるもの」の歴史的記述」は一揆一暴動の存在構造ともいえることで、民衆という概念による権力関係の析出を問題にしています。この中で京都学派のことが出ているのですが、西洋的近代知に対する批判が、スピヴァクが志向していることにつながっていて、わたしとしては廣松さんの「近代の超克論」的などころでの論考にリンクするのではという思いがでています。そのあたり、考え出すにはスピヴァクの読み込みが必要です。どちらにしても、今日グローバルゼーション批判のなかみとして西洋的近代知の「知の抑圧」というようなことの対象化ということで、スピヴァクのサバルタン概念との対話が必要になっていくようです。

たわしの読書メモ・・ブログ 212

・G.C.スピヴァク『デリダ論—『グラマトロジーについて』英訳版序文』平凡社(平凡社ライブラリー)2005

この本はタイトルにもあるように、デリダの『グラマトロジーについて』の英訳をしたスピヴァクのその本に載せた序文です。

序文ということなのですが、スピヴァクのデリダのテキストクリティークとでも言い得ることで、デリダを通じたニーチェ、ハイデガー、フロイト、フッサールという西洋哲学に大きな位置を占める哲学者との対話、そして構造主義—ポスト構造主義のレヴィ=ストロース、フーコー、ラカンとの対話ということでの展開は、この著者の現代西洋哲学論とでも言い得る内容になっているようです。ですが、この本の訳者の解説によれば、幾重もの難解さの中で、この本が出された当時はなかなか理解されなかったようです。捨て置かれる、批判される事の中で、しばらくしてからこの序文が注目され、スピヴァクにも光りが当たったようです。そもそもデリダ自身が、実践的などこにつながらない遊比的なところと批判されていたことにもつながっているようなのですが。

ですが、今日どうもポスト構造主義自体が、哲学会ではさめてきている状況があるようです。わたしがそもそもポスト構造主義に留目したのは、フェミニズムの「ポスト構造主義フェミニズム」という流れとの対話からですし、他の差別の問題でも援用されてきていることは、哲学界の流れから遅れてまだ端緒についたところという状況です。

さてスピヴァクはポストコロニアルで、サイドやバーバーと並んで注目されているようです。とりわけ、ポストコロニアルとフェミニズムの交差するところでサバルタンとい

う概念を使っているこの著者の論攻は、グローバリゼーション批判とリンクしていきます。そういう意味で、反差別というところでスピヴァクは注目されているひとなのですが、なかなか未だ理解されていない、みんなに(運動しているひとにも)届いていないようです(そういうわたしも読めないでいたのですが)。

スピヴァクがこのような西洋思想との対話をなしえているのは、インド出身者で、西洋人の立場性に拘束されないところで、西洋思想をとらえられることもあるのではと思っています(時代拘束性だけでない、それぞれの立場での拘束性)。

デリダにあくまでこだわりつつ、デリダの思想も相対化して、マルクス的なところからもとらえようとしている、スピヴァクは幾重にも注目すべき論者です。

さて、わたしがこの本の中で注目しているのは、ポスト構造主義の中身として実体主義批判ということを押さえていることです。このあたり、どのように著者が実際に展開しているのか、押さえていきたいとも思っています。

さて、一つ前のブログで読む順番の様なことを書いたのですが、この本は『現代思想』のスピヴァク特集の前に読んでおくことではなかったかと思っています。『サバルタンは・・・』からこの『デリダ論』で展開されていたことが、『ポストコロニアリズム理性批判』につながっているよう、この本の読み込みに入ります。その前にいくつかの本、雑誌の文の読書を挟みます。

時局川柳 (4)

石原都知事の子は父親とは少しは違うと思っていたのですが、テレ朝での生活保護をナマポ論などとして論じる姿勢は

ブルータスナマポ論じるオマエもか

米倉経団連会長をはじめとする財界の「原発ゼロ＝経済破綻論」のステレオタイプ化した圧力は恐ろしいものを感じます。一体事故が起きたらどう責任をとってくれるのでしょうか？

財界のカネカネカネの圧力よ

その圧力に屈して原発ゼロを一応打ち出していた民主党政権は意味不明の言葉を弄して

情けない原発ゼロはどこに行く

許すまじ朝令暮改の奔走を

マルクスの思想は破綻したのか—反差別論で使えないのか

マルクスは差別の問題をほとんど対象化できていないという批判があります。

ふたつの言い方がされています。ひとつはマルクスは所有からの排除と労働力の価値というところでの差別を問題にしている、他の差別をとらえられなかったのは時代拘束性であるという話です。もうひとつは、マルクスは進歩史観・発達史観にとらわれていた、だから進んだ一遅れたというところでの差別をとらえられなかった、という中で優生思想的なところへのとらわれがあり、そこでの差別がとらえられない構図、そのことは差別の総体的なところがとらえられないことがあったということです。

さて、話がしやすい後者から話を進めます。マルクスは同時代人であったダーウィンの進化論の影響を受けたと言われています。そこで、ダーウィンはその主著の『種の起源』では高等動物—下等動物というような概念は使っていない、だから発達というような観念にはとらわれていないというような押さえ方があります。しかし、他の著書を見ているとやはり、高等—下等というところにとらわれているとしか言いようのない論攻があります。やはり、発達という概念はダーウィンにあり、その影響をマルクス／エンゲルスも受けていたということは言い得ると思います。というより、ダーウィンの進化論自体が資本主義の時代の時代精神のようなことから生まれ出た思想だという言い方もできます。さて、そこでダーウィン進化論自体のとらえ返しの問題があります。ダーウィン進化論への批判はさまざまに出てきていますが、そのひとつに今西進化論があります。その棲み分け理論は一つの種が他の種を押しつけていくということではなくて、環境に合わせて亜種として棲み分け分化していく、必ずしも全面的に「発達」するのではなく、あることに合わせて分化していく、「発達」と「退化」が同時に進行していく様な事態になるということなのです。

「死へ向かって発達する」というような修辞があるようなのですが、それは老いということを手放したところから出てきています。事実上、ある一つの側面である年齢まで「発達」するということがあり、その年齢を超えると今度は「退化」するという事態です。さて、ここで「退化」とか「発達」とかいうことばを使っているのですが、そもそもそこから問題にしていく必要があります。

万能な種というようなことはありえません。何かができるようになると何かができなくなるというようなことが常です。ですから、「発達」だけでない「退化」ということもついてまわっているのです、そもそも「進化」と「退化」がセットになっているのです。そもそもなにをもって「進化」や「退化」ととらえるのかがその時代や社会の価値観にとらわれていることなのです。もうひとつ書いておきたいのは、できることの反対はできないことだけでなく、どうでもいいということがあるのです。わたしたちはある時代のある社会の価値観にとらわれていて、その価値観を相対化できないままに、ステレオタイプ化されたところにとらえ、それが永遠に続くような錯覚に陥っているのです。

さて、そこでマルクスの発達史観や進歩史観と言われていることです。

生産力と生産様式の間から生産力が発達していけば革命が起こるという図式を描いたということが言われています。だから、生産力の発達ということを高く評価したとい

う話です。実はこのあたり、生産力の発達が革命とつながるのかということでの問題があります。そのことはマルクスの限界ということです。ずっと前から言われてきた、マルクスには帝国主義論が無かったという批判ともつながっています。生産力が「発達」—増大しても、生産様式の矛盾から革命ということにつながらないで、外部の内部化というところや、内部の外部化ということが起きて、矛盾が転化されていく構造があるということです。マルクスも、そのようなとらえ返しがまったくないわけではありません。しかし、そのあたりのことが「時代拘束性」もあって十分おさえられていませんでした。だから、内部の外部化ということを含む差別の持つ意味も、現象も押さえられなかったということがあったのだと言います。

それらのことは進歩史観として、奴隷制—封建制—資本主義—共産主義という時代の流れを進歩としておさえた、だからそのような中で、発達とか言う概念のとらえ返しができなかったし、差別の問題がとらえられなかったという批判も出ています。

実はマルクスは『資本論』執筆と並行して古代社会ノートやロシアの農村共同体研究などに手を付けていて、「資本主義に先行する諸形態」の中でアジア的生産様式論も出しています。少なくともマルクス曲解の中ででてくる単線的発達図式からは離脱していた／しようとしていたというとらえ方ができることでないかと言います。

だから、単に限界性だけでなく、一部超えていたこともある中での時代拘束性です。そもそも時代拘束性の話を持ち出すことにどのような意味があるのかのとらえ返しも必要です。それについては後述します。

もうひとつ、「時代拘束性」だけでない、西欧中心主義という「立場の拘束性」の問題を押さえねばなりません。そのあたり、サイドやスピヴァクなどのポストコロニアリズム批判との対話が必要になってきます。

さて、そのようなマルクスのとらえ返しをしていると、そもそも「マルクスの思想は社会主義国家の崩壊で破綻した、だからそんな思想を使って理論的作業をなしえない」という言い方をするひとがいますし、その問題の議論が必要になります。ですが、そもそも崩壊した「社会主義国家」はマルクスの思想の継承の中で作られたのでしょうか？ まず、そもそもマルクスは「社会主義」ということばをほとんど使っていないということがあります。また、マルクスは「共産主義社会の成立には世界革命が必要だ」と言っていて、「社会主義国家」ということが「一国社会主義の建設は可能だ」として入っていったということは、マルクスの思想を踏み外しているという指摘もあります。さらに、そもそもロシア革命以降の「社会主義国家」ということが果たして社会主義として定立したのかという批判があります。そもそも、社会主義自体が成立しなかったということで、ロシアを始めとする「社会主義国家」は実は「国家独占資本主義」とか「社会帝国主義」といわれることで、資本主義の枠内でしかなかったという押さえ方ができています。そんなものは恐怖政治で維持するしかなかったことで、そんなものが破綻したことを、なぜ「共産主義革命の破綻」と言い募れるのかという問題です。

もうひとつ書いているのは、疑問が呈されたのは「共産主義革命論」で、唯物史観や物象化論まで葬り去る問題なのかということがあります。

そんな話の以前に、そもそも理論の深化をどうして、ステレオタイプ化されたところで

スポイルできるのかの問題があるのです。

市場経済はなくなるといふところでの、分析を掘り下げるのをやめてしまうといふ自体が意味不明なのです。

さて、もう一つの前者の話、どこまでが時代拘束性なのかとか、どこまでがマルクスの思想なのか、という話は、わたしは不毛だと思っています。どんな思想も現代的に自らがテキストクリティークしながら使っていくこと、継承は検証し止揚していくことでしかないことで、その中でマルクスの使えることは深化させながら使っていくことだとわたしはと思っています(その他ポスト構造主義の思想とかも同様です)。実際わたしはマルクスをその思想の継承—止揚する廣松さんの理論の継承—止揚とともに少しずつやって来ているつもりです。

もうひとつ誤解のないように書いておきますが、少なくともマルクスの思想を語る者として、マルクスの思想を語る人たちの間で起きたいろいろな問題の総括は、それはマルクスの思想とは無縁だとしてすまされることではなく、きちんと検証していかななくてはならないことがあります。わたしはそれを反差別をマルクスの共産主義の思想の基調にすえることとして総括して理論的深化を勝ち取っていく必要があると思っています。

(編集後記)

◆巻頭言は、一旦議論を始めると熱くなってしまふ、自らの戒めの覚え書きのようなことです。

何のために議論をするのかという原点にくり返し立ち返り、議論をしていきたいと思っています。

◆読書メモは今回も本が読めなくて、分量が少なくなりました。で、全体の分量も少なくなつたのですが、むしろこの位が丁度読める分量かなとも思っています。

◆今後の読書計画は、雑誌を数冊挟んで、スピヴァクに戻り、崎山さんの『サバルタンと歴史』を読み、フェミニズム関係の本を読んで、溜まっている障害関係の本に戻ります。それから廣松派関係の本を読んでから、それに前後してマルクスの本を押さえます。あくまで更新していく仮の案です。資料的に貴重な新しい本なども出てきます。臨機応変に挟んでいきます。

◆民主党政権があいまいななりにも原発ゼロを打ち出したのに、財界、アメリカ、地方自治体の圧力で朝令暮改で、閣議決定を見送りました。経団連の米倉会長をはじめとして、マスコミに露出して「日本経済の破綻」とか、「資本の海外流失」をいうひとたちは、次に原発が起きたときに、そして今回の原発事故にも、どう責任をとるつもりなのでしょう。

◆『「反障害原論」への補説的断章』は、議論をしていたときに出ていたマルクス批判へのとらえ返し作業です。マルクスをベースにした運動の総括作業が求められているのですが、とりあえずわたしの反差別論からするマルクス批判—マルクス論としてまとめてみ

ました。

◆母の介助をしながら、介助一労苦論を考えていました。確かにわたしも理論と実践の乖離的状态になり、自らの思想性を問いながら、反省をくり返していたのですが、結局、これは基本生活保障の中で、介助が需要を供給が上回り、介助者が介助待ち状況を生み出す態勢を作り出していく必要の問題だと思っています。そんなことを考えながら、モリスのフェミニズム障害学は、フェミニズムの「個人的なことは政治的なことである」という提起をとらえ損なっているのだと考え出しています。そして、これこそが物象化の問題だともとらえだしています。このあたり文にしてみようと思っています。

介助はかなり時間がかかり、読書計画にも支障をきたし、かなり体力も消耗してきているのですが、むしろ貴重な経験でもあります。そんなことを考えていたら、すごく気持ちが楽になってきました。

母のプライバシーの問題もあるのですが、「介助日誌」のようなことをここでも書くことを考えたりしています。まだどうするか未定ですが案だけ提起してみました。

訂正

「反障害通信 37 号」の横書き版とそれを PDF 化してホームページに載せたもので、最後の論攷のタイトルの冒頭に「『反障害原論』への補説的断章 (12)」を入れ忘れてました。もし保存されている方は差し替え、訂正しておいて下さい。

反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HP アドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>